

司式 熊田雄二牧師
奏楽 浅池慶子姉妹

前 奏
開 会 招 詞

* 賛 美 歌 5:1 恵み豊けき主を

恵み豊けき主をほめたたえまつれ その御慈しみはときわに絶えせず
救われし御民よ 厳かに歌え 憐れみと誠は変わる事なしと アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならぬことをせず、してはならぬことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。主イエス・キリストの御名によって。

アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 5:2 悩み迫る時も

悩み迫る時も御名を呼ばわれば 主は答えたまいてこの身をば救い
いと広き所に憩わしめたもう 主共にましませば我に恐れなし アーメン

公 同 の 祈 禱 祈禱書23 救済史祈禱④ モーセ契約

主なる神さま、あなたは、闇から光が輝き出るように命じ、海と陸とを分けさせられた、大いなる神です。万物の主であるあなたは、ただ一人「ある」と言われる方であり、「信じる者の神となる」と宣言されたお方です。あなたは、信仰の父祖たちとの契約を覚えて約束の民を顧み、モーセを用いて彼らをエジプトの奴隷状態から救い出し、シナイ山で契約を結び、律法と制度と儀式とを授けられました。この贖いと契約が、イエス・キリストによって、わたしたちが罪の奴隷状態から救い出される出来事として実を結んだことを、心から感謝します。(出エジプト3～、ヘブライ3、「聖書」一)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 九州伝道 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書9章51～62節(新約聖書124頁)

説教・祈祷 「主は言われる我に従え」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 99:1, 3

1 教えたまえ我が主よ 我が行くべき道を

朝に夕に御言葉もて 聞かせたまえ我が道

3 教えたまえ我が主よ 迷い憂いある時

雨風にも暗闇にも 照らしたまえ我が道 アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 66 世をこぞりて

世をこぞりて ほめたたえよ

御栄え尽きせぬ あまつ神を アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老(司会・受付 次週:門脇献一長老)

本日 受付 1階:那珂信之執事 2階:長尾牧執事 / 動画:門脇光生兄弟 録音:大日南信也執事
次週 受付 1階:森永美保執事 2階:若月学執事 / 動画:森永翔馬兄弟 録音:門脇光生兄弟

I 焼き滅ぼしましょうか

福音書の後半は、キリストの受難と弟子たちの高慢を描いています。誰がいちばん偉いかという議論の次に、また高慢なことを言ったのは、ヤコブとヨハネでした。「彼らを焼き滅ぼしましょうか。」

先週配布された月報「あゆみ」に、埼玉西部地区8・15集会で私が短い基調講演をしたのを収録しておきました。「－2001年9・11「アメリカの同時多発テロ」から20年－」というテーマで、メイン講師はスパーリンク宣教師でした。

私が務めた基調講演は、ここに収まるくらいの短い前座です。二つの点を挙げまして、一つはテロというものの宗教的側面、もう一つはテロへの報復のために作られた「愛国者法」の問題ですが、ヤコブとヨハネの「彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言ったのは、テロの宗教的側面と同じです。そこを抜粋してみましょう。

「世界貿易センター・ツインタワーという名のとおりに、犠牲者は国際的です。国際的な無差別テロです。・・・日本人も、もちろんいました。無差別テロは、自分たちの宗教や思想以外の人間は汚れているので、抹殺して清めるという主張です。オーム真理教の「ポア＝浄化」に等しいと言えます。

そこで、彼らから言えば、テロでも殺人でもなく、汚れたこの世を清める宗教行為なのです。ですから、アメリカ人だけを対象としたわけではなく、自分たちの宗教思想以外の人間は皆、対象なのです。人間が汚れているから罰して滅ぼすという裁きですが、これは、まことの神だけができることです。人間ができると主張するのは思い上がりです。あるいは、人間が神に命令させて行為に及ぶことは高慢です。」

ヤコブとヨハネは、また弟子たちは、まだユダヤ教から脱出してはいません。その原理主義的な信仰の中にいます。「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」これは、「人間が神に語らせて行為に及ぶ」高慢です。「人間が汚れているから罰して滅ぼすという裁きは、まことの神だけができることです。」聖書には、この時点ではまだ新約聖書がありませんから、聖書と言えば旧約聖書のことですが、ソドムとゴモラの町が天からの火で滅ぼされた、という話があります。それを思いながら「主よ、お望みなら」と主に語らせて、「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」というのは思い上がりです。

II サマリア

ただ、場所がサマリアだったというのは、ソドムやゴモラとは違います。ソドムやゴモラは異邦人の町ですが、サマリアは、かつてイスラエル十二部族に属していました。ソロモン王の偶像礼拝の導入が神の怒りを買って国は分裂し、北イスラエルと南ユダに分かれました。

そして南ユダがユダヤ、北イスラエルがサマリアと呼ばれるようになりました。北イスラエルは、アッシリア帝国に滅ぼされて植民地となりまして、サマリアと名前を変えられ、混血により多くの宗教が混ざり合うようになりました。そこでユダヤ人は彼らを軽蔑

し、ユダヤ人とサマリア人は仲が悪くなったのでした。もっとも、南ユダがバビロンに滅ぼされたのも、エルサレム神殿に多くの神々を混ぜて、神の怒りを買ったからです。

それでイエス様がいよいよ十字架に架かるためにエルサレムに向かう途中、サマリアで一泊か二泊する必要があったのですが、サマリアの村人に断られたのでした。それでヤコブとヨハネが過激なことを言ったわけです。ところが、イエス様が十二使徒をお選びになったのはイスラエル十二部族のためでした。ユダヤ人だけのために十字架にお架かりになるのだったら、ユダ族とベニヤミン族の二部族だけです。「イエスは振り向いて二人を戒められた」のは当然です。

ガリラヤからエルサレムまで歩いて三日はかかるので、どうしても途中のサマリアで宿泊しなければなりません。そこで「一行は別の村に行った」とあります。受け入れてくれる村はあるでしょうか。サマリアというと、次の10章に「善きサマリア人」の話があるので、サマリア人は親切だと思われがちですが、あれはイエス様がたとえでおっしゃったことです。

追いはぎにあった人をユダヤ教の宗教家である祭司やレビ人は見捨てましたが、一人のサマリア人が親切に介抱したという話です。これは、イエス様に悪意を持って質問した律法学者に、彼が困るような譬えをお話になったのです。実際にそういう出来事があったわけではありません。

実際は、ヨハネによる福音書4章の「サマリアの女」の話にあるように「ユダヤ人はサマリア人とは交際しない」のです。ところが、イエス様から話しかけられて、サマリアの女はビックリしました。さらに自分の過去を言い当てられて、もっとビックリしました。そして、イエス様がキリストだと分かると、町中にイエス様のことを話しました。

町の人たちはイエス様の所にやって来て、イエス様から直接お話を聞いて、イエス様がキリストであると信じました。このように、サマリア人も救い主キリストを待ち望んでいたのです。そして、ぜひ、私たちの所にお泊りくださいと頼みました。この町は「シカル」という町でした。シカルの町なら泊めてくれたでしょう。

Ⅲ 私に従いなさい

さて、イエス様一行は、イエス様が最後を遂げるエルサレムに向かって行かれます。ここで「弟子の覚悟」という段落があります。けっこうたくさん弟子がイエス様に命がけで付いて行くと言いながら、実際はそうではなかったという例です。

並行記事にマタイ8：19-22と小見出しの下にあります。マタイ福音書では前半のガリラヤでの話になっているので、解釈が難しくなっています。ルカ福音書では後半のエルサレムに向かう場面での話になっているので、解釈は難しくありません。この辺、詳しく順序正しく書くというルカの方針が助かります。

最初に出てくる弟子は、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言いました。それに対してイエス様は言われました。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」これは、イエス様が生涯、身を横たえて寝る所もなかったという意味ではありません。最後には、十字架を立てるために掘った穴しかありませんでした。つまり、あなたは自分の十字架を負って「命をかけてついて来るか」という意味なのです。これなら、十二弟子も、俺も俺もと言いますが、誰もできませ

んでした。人間の罪のために十字架に架かることができるのは、神の御子のイエス様だけなのです。

その次に出てくるのは、イエス様から「私に従いなさい」と言われて、従うけれども「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った人です。それに対してイエス様は言われました。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」これも、葬式を否定しているのではありません。私に従う者は命をかけて私に従え、という意味です。「主よ、まず」と言ったら、「まず神の国と神の義を求めよ」なのです。

三番目に出てくるのは、同じようにイエス様から「私に従いなさい」と言われて、「主よ、あなたに従います。しかし、まず、家族にいとまごいに行かせてください」と言った人です。それに対してイエス様は言われました。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」これも、家族をないがしろにしてもいいという意味ではありません。これも「まず」という一言が問題なのです。イエス様に命をかけて従え言われたら「しかし、まず」という言葉はありません。イエス様に命をかけて従う者には「まず神の国」があるのです。

このように、ルカ福音書が分かりやすいのは、場面にあります。イエス様が十字架に向かって行く場面なのです。57節の「一行が進んでいく」という道は、51節の「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」という道です。だから、「私に従いなさい」というのは、私に命をかけなさいという意味です。

しかし、その時の弟子は誰もできませんでした。十二使徒もできませんでした。しかし、主イエスが死と復活により天に上げられたらできるようになりました。弟子たちには罪の赦しによって神の義が与えられ、神の国に入るための永遠の命が与えられ、天に居場所が用意されて神の子たちと呼ばれるようになったからです。それは、私たち現代の弟子たちも同じです。神の子たちの使命は、御国を来たらせたまえと祈りながら、神の国を言い広めることです。